

演説館



福澤先生とその門下生たちは、西洋のルビッチ、デイベートを研究し、わが国の「演説」を創始しました。三田演説館は、1875（明治8）年に開館した日本最初の演説会堂です。

●常任理事

こくりょうじろう
國領二郎

情報基盤の再構築について

慶應義塾を支える情報基盤を抜本的に見直すべき時が来ていると考えて取り組みを開始しています。流行語で言うところの慶應義塾版デジタルトランスフォーメーションを断行します。

1990年代に構築した慶應義塾の情報システムは、それぞれの現場の皆さんの努力で進化を続け、提供サービスだけ考えると、国内のどの大学と比べても遜色ないものになっているように思います。一方、今後とも日進月歩する教育、研究、医療の情報化に対応して、世界レベルの学びや研究の環境を（安全に）提供するためには、細分化したシステムを、部門横断的にデータを活用できる新しいシステムに脱皮させなければいけません。継ぎはぎシステムのままでは、機動性に欠けるだけでなく、継ぎ目部分がセキュリティ上の穴になってしまいます。統合的なアクセスコントロールの下で機動的にデータ連携を可能とする仕組みを中心に、周囲に機能を高めるさまざまなシステムが配置される構造が必要です。

学生、受験生、保証人や研究者の皆様によりサービス志向の高い仕組みを提供したいという思いもあります。今は、残念な

がら不必要に紙の書類を窓口に持参しないといけないような古い仕組みが多く残っています。同じ情報をあちこちで繰り返し入力する無駄も発生しています。紙の情報伝達媒体としての優秀さは不変だと思う一方で、こと手続きを行う上では、紙や印鑑に頼るシステムは、ユーザにとっては不便なものですし、職員にとっても効率を落とす原因となっています。書類処理に費やす時間を圧縮することで、より創造的な作業に注力できるようになります。ICTを活用したテレワークなどにより、働きの方の改革も前進するでしょう。

情報化の波の中で、大学の姿は大きく変容しつつあります。たとえば、大教室で一方的に聞くような知識習得型授業はオンライン教材に置き換えられつつ、教室は世界中から情報を収集しながらプロジェクト的に学生が新しい制作物を作る共同作業をする場になっていくような未来が展望できます。そんな時代に世界に冠たる教育研究ができる学塾に進化させたいと思います。